

495

特 225
220

心 後



び

參謀本部勤務
田中中尉





影 近 者 著

序に代へて

曙の子等よ、海原の子等よ

花と焔との國、力と美との國の子等よ

聞け、涯しなき海の諸の波が

日出づる諸子の島々を讃ふる榮譽の歌を

諸子の國に七つの榮譽あり

故に又、七つの大業あり

さらば聞け、その七つの榮譽と使命とを

一、獨り自由を失はざりし亞細亞唯一の民よ
貴國こそ亞細亞に自由を與ふべきものなれ

一、曾て他國に隸屬せざりし唯一の民よ

一切の世の隸屬の爲に起つは貴國の任なり

一、曾て亡びざりし唯一の民よ

一切の人類の敵を亡ぼすは貴國の使命なり

四、新しき科學と古き智慧と

歐羅巴の思想と亞細亞の思想とを

自己の中に統一せる唯一の民よ

之等二つの世界

來るべき世の之等兩部を統合するは貴國の任なり

五、流血の跡なき宗教を持てる唯一の民よ

一切の神々を統一して

更に神聖なる眞理を發揮するは貴國なるべし

六、建國以來一系の天皇

永遠に互る一人の天皇を奉戴する唯一の民よ

貴國は地上の萬國に向つて

人は皆一天の子にして

天を永遠の君主とする

一個の皇國を建設すべきことを教へんが爲に生れたり

七、萬國に優りて統一ある民よ

貴國は來るべき一切の統一に貢獻せん爲に生れ

貴國は又戰士なれば

人類の平和を促さんが爲に生れたり

曙の子等よ、海原の子等よ

斯の如きは花と焔の國なる貴國の

七つの榮譽と七つの大業なり

これは佛人、ポール・リシャール氏、物する所の日本國民に寄するの歌だ。

同胞諸君よ！

いや特に親愛なる我が皇國の青年諸君よ！！

諸君に今こゝにいふ祖國の七つの榮譽と七つの大業とを負ふの氣力と體力ありや

自己の使命に對する自覺と抱負とは充分なりや

内己れを省み外四周に見よ！！

簇々として八千萬の同胞あれども肇國の理想を忘れたるが如く、斷たんとして斷ち得ざる血縁の

情誼に悖り、汲々として自利を追ふ

嗚呼、この榮譽この雄圖果して誰の肩にかある

窮民地に喘ぎ有色の民天に哭すれども義人の叫び尙かすか、大義地を拂つて細戈千足るべきの國

萬足らざるを嘆く。

異端の説横道すれども國論の統一恰もその人なきが如く、統制なき民衆に皇土は今巨大なる隊商



の旅舎の感あり。

治國落莫、社會革正のことは果して誰かよくその任に當るものぞ。

起て！ 全國の青年男子諸君！！

起て！！ 全國の青年女子諸君！！

愛國の炬火高くかざして、今の世の地の太陽たるべき、我等が
青年天子の御稜威四海に治き日を待たうではないか。

昭和八年十一月三日

田 中 中 尉 記





血の叫び

歩兵中尉 田中軍吉

人物

立花光

青年學徒

押川大將 昭

其の兄、軍人

霜田大佐 將

軍司令官

貴島中尉 尉

聯隊長

その他

小隊長

光は眞面目な學徒だつた。

彼は純眞な青年だつた。

彼の心は人道愛に燃えてゐた。

彼は大學の研究室に籠つてゐた。

大學は彼れを助教授に推選したが彼れは斷つた、彼れには大きな煩悶がある。

己れの科學に従へば彼れは傳統、特に國體と戦はねばならなかつた。

晩秋のある夜更け、

彼れは尙も研究を續けてゐた。

森閑とした大きな研究室の中に、電氣が只一つ、彼の机上にだけついてゐた。

夥しい本の洪水の中につかつたまゝ、彼れは原稿を書いたり、破いたりしてゐた。

しかし、どうしても、彼れが思ふ通りの物は出来なかつた。

外には狂暴な嵐が哮えてゐた。

狂はしい夜だつた。

ペンを床に叩きつけると彼れは立つて、両手で髪をつかんだまゝ、檻の中の虎みたいに行つたり來たりした、それから、もとかへつて机につつぶした。

いきなり、まわりのものから、おしつけられてゐる様な氣がした。

室の壁といふ壁にとつつけられた本箱の、すべての本がゲラ／＼と笑つた様な氣がした。

彼れの神経は極度に尖つてゐた。

彼れは誰か人に話して見たい様な氣持だつた、思ひきつて皆ぶちまけてしまひたい様な氣がした、それにはしかしもう遅すぎた、でも聲だけでも出して見たかつた、せめてこの机や本やノート

にだけでも話して見たかつた。

で、彼れは獨りで呻り出した。

『俺は、俺は一體どうすればいいんだ。

科學は明かに否定してゐる。

俺は學徒だ、眞剣な研究だつた。

金の爲ではない、名譽の爲でもない。

さうだ、地に呻く者の爲にだ。

その爲には命だつて投げ出す覚悟なんだ」

『科學は明に示してゐる、俺は學徒だ、

生命を賭けた科學に従ふべきだ、

さうだ、やれ！ やらう！ 街頭に出よう、

こゝまで一氣に云ひ終ると大分蟲が收つた様な氣がした、熱が段々靜まると理性が逐次に頭をもたげて來た。

『惡法も陋習も一度にけし飛ぶ、素的だ、

總てが新しくなる、美しく、善くなる、

古い、醜い、悪い者が皆な影を消す、

歴史も、傳統も』

『歴史も傳統も』もう一回いつて見た、

なぜだか今夜はこの二つの言葉が何だか親しい者の様に思へた。

さう思つて考へてゐるうちになにかしら不安になつて來た。

『然しほんとうに皆が救へるかな、

もう間違ひはない積りだ、然し萬一にも間違つてゐたら、

かけがへのない、ほんとにいゝものが滅で、後に何もいゝものが出来なかつたら、

えゝ意氣地なし、行け、

民衆の爲に死ぬ覺悟ちやあないか、

あゝ、それなのに、それなのに

どうも、どうも、何か不安だ、

どこかかう、頼りない、

何かかう落ちてゐるやうな、何かぬけてる處があるんぢやないか、

何か邪魔してゐる、何の不安だ、

エ、卑怯者奴、ア、やつぱり俺あ駄目だ』

彼れはクツシヨンに深く身を埋めて頭をかゝへたまゝ動かうともしなかつた。

二

彼れの研究の深刻と、透徹した見識は労働黨の垂涎措く能はざる所であつた。

黨員は擧つて彼の入黨を望んだ、
労働黨第一回總會、そこに彼れは何を見たか？
頑強な闘士の集りだつた。

火花の論戰、續いて叫喚、怒號、惡罵、排擠、陥穽、亂闘、そして分裂、
明かに利己だ、幹部の勢力争ひだ、それに彼等を貫く階級的憎惡心はどうだ、そして、彼等が來
さんとしてゐるのは、少數労働黨の爲めの天地だ、

彼等の看板を信じて、彼れが夢みてゐたのは、労働黨の勝利を通じて、やがては、萬民の幸福を
來すことだつた。

あの幹部達にそんな大きな友愛が、慈心が果して期待出来るだらうか、
ブルの暴に代ふるにプロの暴、更に少數の專制が續いて、大衆はやはり苦難の行程を辿らねばなら
ぬのではないか。

労働黨の成功によつて、幾分の正義は實現出来るであらう。一部の労働者は自ら慰むるの道を講
じ得るかも知れない。然し今物的に、或は心的に、救ひを待つてゐないものが國民のどの一部にあ
らうか、

國の構成員は萬民だ、萬民の幸福、之が國の願ひでなければならぬ。そして又それが實に自分の
本願ではなかつたか、自分は自己の研究を今も信じてゐる。

然しいかに制度が改まらうとも、あれ等の幹部が政權をとる限り、あの憎惡が新特權階級に巢喰
ふ限り、舉國の和樂などは決して望み得ない。

この黨では斷じて國は救へない。

醜惡なる現實に直面して、若き理想主義者の夢は脆くも破れた。

かくして彼は黨から離れたのである。『ふざけたインテリだ』裏切者、卑怯者、改變者、數々の
嘲笑も惡罵もそれは何でもなかつた。

彼れの心は、それ以上に、淋しくも、又悲しかつた、ほかに行くべき道はないのか、

かくて日本萬民は遂に救はるべくもないのか、

彼れは都を去つて故郷に匿れた。

三

戰爭が起つた。

戦ひは宣せられ、皇師は戦ひに出て行つた。

昨日も、今日も、

あの家からも、この家からも、

若き壯丁は引きぬかれて行つた。

國民は熱狂してゐた。

そこには涙ぐましき努力があつた。

彼れにはそれは何の關心も起させなかつた。

労働黨は戦争反對の旗を立てた。

然し黨の大部が戦争行動にすべてを抛つて参加したのは注目に値する。

立花昭は國軍の安危を雙肩に擔ふ概を持つた秀才だつた。

出征に當つて弟光のことが氣にかゝつた。

彼れは光の氣持をよく知つてゐた。

違つた立場にはゐた、

然し氣持はよくわかつてゐた。

重要任務を帯びて戰場偵察の際彼れは狙撃せられて死んで行つた。

報告は出した、己が任務は果した、死に當つて心にかゝるのは光のことである。

俺の心持を、俺の遺志をついで呉れるのは彼の外にはない。

死に瀕して、彼れは衷情を紙に述べた、

インキが盡きた、鉛筆が折れた、

彼れは最後に書いた、血で、

『天皇陛下萬歳』と。

四

若き壯丁はすべて出た、

今日は補充兵後備兵が出ねばならなかつた。

光の妹綾子の愛人横川俊夫は輸卒に取られたと狂喜してゐた、

一家も之れを光榮とした。

光には其の心持がどうしてもわからなかつた。

光の愛人糸子が來た。

『私光さんの代りに戦争に行きます』皆泣いた、光は啞然とした、

何が、何が、何が一體、さう一同を昂奮させるんだ。

父は名譽職として、出征軍人其他の世話に夜も晝もなかつた。母や、妹は、慰問袋の調整に忙しかつた。驛には見送りの歡呼の聲が絶えなかつた。

糸子の出發は、遂に光を引っぱり出した、

停車場。そこには何んな光景が展開されてゐたか。

老後傭兵——貧しい一家の別れ、誰れか涙なしに見られよう。

俊夫が行く——綾子の涙に濡れた顔、そこには誇りと悲しみが共にあつた。

その他幾多の愛人夫妻達が引き離されて行つたことか。

産褥にある妻、子供一人を残して行く父、一人子を送りに来る老婆、死を以て子を送る老爺、悲

慘——慘又慘、而も強いて皆笑つてゐた、涙を見せまいとしてゐた。

その笑ひ、其笑ひは何と高價なものであつたか、何と氣高いものであつたか。

皆勇んでゐる、別れの悲しみにさへ勝つてゐる、あの誇らしげな顔はどうだ、無限の悲しみを湛へたあの笑顔、

あれは強請ではない、

何が、何がさうさせるんだ、彼の胸に一抹の疑問が起つた。

發車が間近くなつた。

小學生の歌ふ歌が一入可憐に涙ぐましかつた、

『少年諸君、私はこの老軀を捧げて、君國の爲に最後の御奉公に行く、これからは君達の世の中だ、しつかり勉強をして、お國の爲に立派な人となつて呉れ給へ』

老大尉は涙で物が云へなかつた。

驛長が乗車を促した、慌しい瞬間である。

『さらば少年諸君、俺は行く、

少年諸君、後を頼むぞ、頼むぞ後を』

『後を頼むぞ』あの熱、あの力、

『頼むぞ後を』家族のこともあつたであらう、故郷のこともあつたであらう、

『後を頼むぞ』無限の餘韻が光の胸に残つた。

『光様！』悲痛な叫びが彼れの耳朶を打つた、彼女だ、看護婦姿の彼女の姿が車窓に躍つた。

汽車は走つた、彼れは何が何だかわからなかつた、

『親子！』彼れは叫んだ、叫びつゝ走つた、汽車が彼等の聲を消した。

『光様！』血を吐く様な聲が吐切れ吐切れに叫んだ、彼れは汽車を追つて夢中で走つた、

汽車が遂に見えなくなつたとき彼れは畔に倒れてあえいでゐた、涙がとめどなく流れた。

何といふ感激の瞬間だつたらう、

彼れは何か新しいものを見た様な気がした。

彼等國民は勇んで戦争に行つてゐる、悲しんではゐない、恰かも何等かの權威を持つてゐる様に

勇ましく行く。

何がさうさせるか、

ブルの作戦か、宣傳か、傳統か、群集心理か、彼れの心は再び迷つた。

兎に角、國民が戦争の爲に小異を捨てゝゐるんだ。

國を擧げて戦ひに熱中してゐる、そこには、資本も、ブルも、プロも、何も考へられぬ、

もしこの純眞な人達が、何かに利用されてゐるのだつたら、

冷汗が背すぢを通つた。

さうだ、この統制を正しく使へ、若し不正な使用をされてゐるのだつたら、

看視せねばならぬ、

さうだ、正しき力の正しき使用だ。

これを利用せんとするブルの一派がある、

これを利用せんとするプロの一派がある、

斷じて正しく進むのだ、

公憤に彼の顔は珍らしく上氣してゐた。

五

一片の辭令がすべてを簡單に片づけた、

彼れは戦地に送られたのである。

彼れはすべてに興味がなかつた、國民的熱狂もなかつた 彼れの教養は、只靜かに、すべての命令通りに彼れを動かしたただけだつた。

彼れの小隊長は貴島中尉だつた、

彼れは身を以て衆を率ゐた、彼の近代的精神、英雄的行動、人道的思索は、すべての者に、敬愛の念を起さしめずにはおかなかつた。

彼れは熱烈な愛國者だつた、彼れの熱情は、熱血兒光に容易に移つて行つた。

光の履歴を知つて、彼れは一夕戦ひのあひ間に沈み行く夕日を浴びながら語た。

『君が燃える様な正義感、人道觀から、救世の願ひを起して、苦しんでゐる姿を、僕は太變貴いと思ふ、基督だつて、釋迦だつて、マホメットだつて、孔孟だつてとにかく後世に多大の崇拜者を持つて、人々から慕はれてゐる人は、救世の願ひといふ所で、すべて一致點を持つてゐる様に思ふ。』

僕はすべて人の爲に盡さうと考へてゐる人を尊敬する、社會運動だつて、労働運動だつて、道徳運動だつて、とにかく世の中に裨益しようといふ考へからしてゐる者なれば、僕は無條件に尊敬を拂ふものである、學生の共産運動、セツツルメント運動、國際運動等々の事業、僕は實に彼等の人道愛に動かされゝる。僕は一面非常に彼等に同感してゐる。

一面では同志とさへ思つてゐる』

中尉の言葉には、眞實が、眞剣さが溢れてゐた。

光は不思議な言を、不思議な人の口から聞いた。

『然し、僕は彼等を可哀さうに思ふ、』

彼等のあの努力は、直接には大して効果もなく、又大して酬はれもしないだらう。

皇國體、皇國民的生命に立脚せず、マルクス、レーニンの抽象的な、所謂公式から割り出して日本にあふ着物を拵へようつたつて、正しい日本の寸法がわからずにして身體にあつた着物が出来るものか、

それは一種のドンキホーテだよ、

然し彼等は、それを最善の方法と信じてゐる、そして精進してゐるんだ、

純な魄が、この矛盾だらけな不潔な世の中に直面したとき、それが純であれば純であるだけ、

憤らずにはゐられぬだらう。

公憤は遂に彼等をして實行にまで進ましめる、しかも智力不充分的な、浮世を知らない彼等が、今進みつゝある道は皆異つた軌道なんだ、

その道で行つたんでは日本の大衆は救はれぬ。

日本の大衆を救ふには日本獨特の道がある。

もしも彼等が、眞に救世の望みに身を焼くものであつたら、よりよき道を提示してやりさへすれば彼等はその旗幟の下に集るだらう、

又彼等が眞に日本の大衆をこの道により救ひ得ると信じた時に、この運動は統制のある熱と力に満ちた運動になる筈だ。

その前には何の障碍もない、

日本は容易に更正の道を辿るだらう、明日は最後の決戦だ、僕は死ぬ、僕に今餘裕と力がない、これは君等眞摯なる學究に残さるべき問題だ、若し生命があつたら、どうかこれを考へて見てください、どんな方法でも、どんな手段でもいゝ、日本民族は今正しき救ひを待つてゐるんだ」

中尉の心は救世の望みに燃えてゐる様だつた。軍人——國權の擁護に汲々としてゐるとのみ、人殺しにのみ精進すると思つてゐた軍人に、この温かい心がある、而も死に臨んで後を頼んでゐる、再び不思議な疑惑が彼れを包んだ。

何が彼等をさうさせるか？

中尉は更に語をついだ、

『僕等だつて人間だ、生命は惜しい、しかし道義の爲に、萬人の利益の爲に生死いづれを取るべきかを強いられたら、僕等は寧ろ喜んで死をとる、

それが自ら大きく生きるの道だ、

僕等は平和を望む、然り眞の平和を望む、

奴隸的の平和は望まない、

壓があれば必ず反撥がある。

我等は壓なき世にする爲最後迄戦ふつもりだ。』

六

光が質問した、

『では労働者や、無産階級の運動等も認めてゐらつしやるんですか、賛成なんですか』

『固より』中尉は斷乎として答へた。

『我々軍人は皆立派なプロレタリアだ

故に彼等の氣持はよくわかる。

彼等は日本の天皇の御寶として正當の要求をしてゐるのだ。

大君より、萬民に齊しく賜はりたる權利に對して、その損はれたる部分を返せといつてゐるんだ、彼等の要求は正しい。

只彼等がそれを直輸入の鬭争戦法や、労働ブローカーによらねばならぬ今日を不憐にも不甲斐なくも思ふ。

大君の目より見れば、百萬長者も、労働者も同じことなんだ、どんぐりがせい比べをしてゐても、大空から見れば平に見えるんだ、

もしも百萬長者が、君寵我にあり、とでも思つてゐたら大きな間違ひだ。

これが今迄すべてを妨げてゐた。

一夫處を得ざれば、是れ朕が罪なりといふのが大御心だ、すべての運動と、その精神は、國體そのものから發せねばならぬ。

この大御心を思へば、資本家も、政治家も、軍人も、學生も、労働者も考へねばならぬのだ。

この大御心に即して、すべてが行はれて行けば、何でもない筈だ、

日本は一君萬民からなつてゐる。

一夫の災ひあつて何の日本の幸福ぞ、

民に患あつて何で君の喜びぞ、

君民擧つて喜び得る時、眞に日本の幸福があるんだ、

そこに日本の喜びがあるんだ』

中尉の理論は簡單だつた、然し強い何もものかを持つてゐた。

『國內のそれは大御心に即して皆が行動すればそれでよい、

國外のことはどうだ、

諸君は、よく資本家の不勞所得とか、搾取とかをひどく悪んでゐるね、

僕はこれを世界の領土侵略史の上に見る、アフリカを御覽、アメリカを御覽、シベリアを御覽、

印度を御覽、オーストラリアを御覽、アヂヤのすべてを御覽、いつからあれが白人の手に入つたか、

いつからそれが彼等の搾取場になつたか、

誰が之を目して不勞所得でないと云ひ得るか、

列強は只『來たり、見たり、取れり、搾れり』

おゝ、未だに只かくてありではないか。この儘の姿で、この儘の形で、我れに平和でゐるといふ

のか!

世界は全人類から成つてゐる、一人種の幸福なくして何で全人類の幸福ぞ、更に祖國日本の幸福なくして何の世界の喜びぞ、又世界の喜びなくして、いづくにか、又幾日か我が國家の喜びぞ。

更に進んで、萬物興つて傷けざるの世に至るこそ眞に天地生成の喜びではあるまいか、是れこそ、眞に天の心ではあるまいか。

労働者の公憤と、被壓迫民族の公憤と、似通つた或るものを持つてゐるではないか、總てが幸福になるために、資本家は先づ己が身を省みよ、敬虔なる心に歸つて、彼等が己れを省みる時には、目前に大道の顯かなるを見るであらう。

白人はすべてもとに歸れ、といふ心は地圖を塗りかへろといふのではない。

お前達が人でないといふのではない、我等も亦立派に人だ、神の子だといふ事を認めろといふのだ。白人等よ、謙讓の徳、教養の誇りを示せ。

卿等が奉ずる基督の教義は決してそんなには教へてゐない筈だ。

この世をブルもなく、プロもなく、白もなく黄もなく、黒もない、一對一の交際の出来る日にしろ、

その日に於てこそ眞の平和が來べきだ、

我々は何によつて此れを達成すべきか?

國內に對しては大御心に即するがいゝ、國外に對するは即ち國家の力だ、こゝに國權擁護の意義がある。

この理想に燃えて萬民が協力するとき、すべてが遂行できる。

そこには野心もなく、慾もない。

すべてが聖戰の爲に費されるのだ。

若し、之を、私慾に、私利に用ひ様とするものがあつたら、そのときこそ、我が正義派が、死を以て争ふの時だ、聖戰だ!!

戦は悲惨だ、國內での悲惨呼ばはりは、尙活動や小説を見て涙するに等しい、涙は出、泣きはしても、自らは少しも痛みは感じて居ないのだ。

ほんとうに、戦争の悲惨を知つてゐるのは我等だ。

戦争の危険を知り、而も敢て戦はむとする、好戦ではない、この悲惨を敢てする心持を見てくれ、皆が然し、此の心持になりさへすれば、恐らくは戦争の要はなくなるだらう』

それは光が始めて聞いたことだつた、自分が科學で到達しなかつたことだつた。

領土の清算、そんな原理も立つんだ。

「日露戦争のとき、我々の先輩は、ウラルまでも前進し、白人の勢力を、東洋から驅逐してしまふ積りだつたさうだよ」
中尉の意氣は、誠に軒昂たるものであつた。

七

珠靈山が落ちぬ、

もう半年も引き續いて、何千何萬の忠魂が、毎日、毎日捧げられた。

これが落ちなければ、一國の安危にかゝる、これが落ちれば、勝敗は自から明かである。

敵もよくそこは知つてゐた。

押川將軍は本營で珠靈山を眺めてゐた。

幾萬の屍に山は黒づんでゐた。

灰色の宵暗がせまつてゐた。

かすかに突喊の聲、急射撃の音、

「嗚呼又忠魂が飛ぶ」將軍は暗然とした。

各大隊長以上が集まつた。

將軍は嚴かに命を傳へた。

「國家ノ安危此ノ一戰ニカ、ル、軍ハ全滅ヲ賭シテ最後ノ總攻撃ニ移ラントス、自分モ亦生還ヲ期セヌ覺悟デア、ル、筑紫師團ハ今夜半ヲ期シテ攻撃前進、珠靈山高地ヲ占領スベシ、軍ハ貴師團ノ成否ニカ、ハラズ、明拂曉總攻撃ニ移ル、各隊ハ午前三時迄ニ、所命ノ位置ニ攻撃準備ヲ完了シアルベシ」

參謀長がつけ加へた、

「明日は皆死ぬ覺悟です、砲兵も弾丸を打ち切つて下さい、

航空機も明日以後は一機もいらぬ様になります」

筑紫師團長は命じた。

「霜田大佐八時出發にする、今夜は霜田聯隊が、珠靈山高地の真正面ちや、攻撃の成否、懸かつて君が双肩にある、死闘を願ふ」

「霜田一期の面目」大佐は莞爾と笑つた。

明日は皆死ぬんだ、別杯があがつた。

期せずして皆祖國の方に向つた、

同胞八千萬和ぎの國、父母います懐かしの國、大君います美しき祖國。

『さらば我等、喜びていけにゑとならむ、

天よ、願はくは此のいけにゑをして最後のものたらしめよ』

皆同じ思ひをいだいてゐた。

一同立つて珠靈山高地を眺めた。

血を吸つた山、肉に包まれた山、鬼哭正に啾々たるものがある。

悲壯な氣持で、悲壯な決心で、一同は己が陣營へと別れて行つた。最後の決戦の準備は、もう皆

出来てゐた、部署もきまつてゐた。

今は只指揮官が位置についてくれればよいだけだつた。

『あゝ、この次は皆揃つて靖國社頭であはうぜ』

『皆こゝろ』

『俺はきつと行くぞ』

それは凄惨な、あまりにも悲痛な會話だつた。

それ以上、もう誰もいはなかつた、何も云はなかつた。

共通な心の鎖で、皆つながれてゐる様な氣持だつた。

八

皆もう部署についてゐた。

準備は整つた。

皆何も云はなかつた。

肅然と待つてゐた。

皆荷になるものは、すべて残しておいて來たのだつた、糧餉も持たなかつた。銃と、劍と彈藥と、

そこばくの裝具だけしか持たなかつた。

水筒だけ、それも最後の決戦まで、精根を保つだけの目的だつた。

我々の死が萬事を解決する。

我々は我が全國民の公敵に向ふんだ。

我々は選まれた者達だ。

國民全部が我々の後に居る。

又我々の勝敗は國民全般の安危にかゝる。

我々が犠牲になつて、我々の父が、我々の母が、妹が、弟が、子が、子孫が救へれば本望だ。

我等か存在の爲めの戦ひ！

正義日本が存立の爲めの戦ひ！！

聖なる使命の遂行の爲めの戦ひ！！

その信念がしつかり皆の頭に入つて居た、恐ろしい死も何でもなかつた、崇高な犠牲的精神がすべての心を支配してゐた。

皆まだ生きてゐた人である、が、もう皆、死んだ氣でゐた、人ではなかつた神であつた。

霜田大佐が陣頭に立つた、軍旗が之に續いた。

冒し難い或權威に引きづられる様に皆之に従つた。

全軍皆之を見送つた。

軍樂は靜かに『海ゆかば』を奏した。

『足弟達よ、明日は、俺達も皆續くぞ』

悲壯な、悲壯な、しかし甘美にさへ思はれる氣持だつた。

悲壯美、たしかにさういつた氣持だつた。

九

敵から約二軒の線に近づいたとき。

聯隊長は白の手旗を靜かに倒した。

全隊が靜かに靜かに伏せた。

靜かな靜かな森が睡つた様な靜けさだつた。

ひそくと森がさやく様なひそめきがあつただけだつた。

四千の銃聲は息を凝らして其指揮官にすべての注意を凝集してゐた。

細い眉の様な月が山の端に之つて來た。

鱗の様に背きれいに竝んで伏せたまま動かなかつた。

三箇大隊が齊頭に縱隊横隊の儘伏せてゐた。

機關銃歩兵砲が卸下して之に續いてゐた。

聯隊長が旗を左右に振つた。

兩翼の大隊が静かな風の様に前進を起した。

皆闇の中に軍旗に向つて最後の訣別をして出て行つた。

兩翼の大隊は前進中に歩み寄つて長方形になつた。

中央大隊の四角が之れを追つた。

今迄にあらゆる術策は施して見た。

そして皆駄目だつた。もうかうなつては術も策もなかつた。

整々と正面から猛火を潜つて危険を冒して行くより外はなかつた。

損害は物凄いだらう、殆ど大部やられるかも知れぬ、然し残つたものだけでも突入出来れば、そ

こに幾多犠牲の希望も達せられ様といふものだ。

弾丸が時々頭のすつと上の方を飛んでゐた、一面に連つてゐる丘阜の方々にチカツチカツと赤い

火がきらめいた、二三秒たつとタンタンと音が聞えた、千米近くに入つたに違ひない。

前方から順次に姿勢を低めて来た、皆匍ひ出したのである、先頭の指揮官は只管、山へ、山へ、

と緩い斜面を登つて行つた、皆目の前の地べただけを見てゐた。

何も考へずに前の後ばかりを追つてゐた。

『何しにどこへ』

誰かゞ若し、列中の兵にきいたら、きつと、

『エツ何ですつて、僕達？あゝ今匍ひづりごつこをしてゐるんでさあ』

と事もなげに答へたであらう。

外線にゐる者達の神経だけが、針の様に周囲に向けられて居た。

三丁四方の針の音も逃さぬ地獄耳、

彼等の耳は全く其の位の働きをして居た。

斜め右三四百の處で『ポーン』と音がした。

一條の光芒が眞一文字に上つて行く。

登り切つた所で圓い弧を描いて落ちかけてはたと止まつた。

『パアツ』青白い閃光が下界をくまなく照した。

光弾だ、信號弾だ、

その瞬間にはもう皆、地べたにべたつと、くつゝいて居た。

刀尖も 劍身も、皆黒く塗つてあつた。皆薄黒い蔽ひをかぶつて居た。動きさへしなければ、全

近くにもても、見當さへもつかなくかつた。

『ポーンパツ、ポーンパツ』
殆ど戦場の同線あたりで、同様な光弾が上がつた、光弾でこちらの近づいたのを知り、進路や位置を知らず、それやあ豫ねて心得たことだつた、『其手は桑名』赤や青や色々の光弾が美しく戦場の空を彩つた。

最初の一發が敵か、

あとのどれが味方か、

それは誰にもわからなかつた。

『グワツグワツ』巨弾が唸つて飛んだ。烈鐵の小さなかたまりが頭上を位く壘上に向つて飛んだ。此の花火戦をきつかけに、味方が先づ力づよい砲火を敵壘に投げてくれた。

『ダツグワツ』『ダツグワツ』

壘上で凄まじい爆發が続いた。

前面の山々が一齊に明滅するイルミネーションを點けた。

『ジューン、ダツグワツ』

つるべ落しに大小幾多の敵弾が自ら打を始めた、

聯隊の位置はまだよくわかつてゐないと見える、とんだ處で、とんだ物が損害を蒙つて居た。

狂ひ出した馬が、遶下の方で犠牲になつた。

突撃部隊の中にはまだ一發も來なかつた。

頭上を、右往左往しながら織出される凄まじい弾路の下に、皆しばらくは安住の地を得てゐた。

地獄と極樂とは隣合せにあつた。

『シューン』流弾が山道の右肩から左側へぬけた。

『ウツ畜生ツ』それきりだつた。

其の瞬間、部隊は再び匍つたまゝ、前進を始めた。

隣の吉澤が驚いて向直つたとき、彼は手を振つた、次に両手をあはした、次に山を指した、彼の斷末魔の眼が凄く吉澤に目に残つた。

山道は右腕の服の袖を喰ひ切つて咬へてゐた、齒ぐきには血がにじんで居た、それは聲を立てない爲めの用心と容易に察せられた、吉澤が手を出さうとすると、彼は又手を振つた。

右手でバラバラと砂地をかき終ると、彼は何もいはずに頭をそれにつゝこんだ、左手に銃をしつ

かり掴み、右手に山を指し、足をふみ開いたまゝの姿勢で、
吉澤は死んでも尙、山に向つて進まんとしてゐる山道の氣魄に押された。

十

敵壘まで、もう五六百だつたであらう。

右から、左から、上から、大小の銃砲火がガンガン来た、こゝかしこに傷者死者が出来た。

しかし皆ひたすらに進んでゐた。

砲弾が来て指揮官をさらつた。次の指揮官が代つた。

一同にとつて實はそんなことはどうでもよかつた。

事實、皆攻撃の精神に燃えてゐる時には、指揮官は只、方向を示す役をするだけだつた。

指揮官の勇敢も何もすべて其の左右の四五十にしかわからなかつた。

しかし指揮官の数が、戦友の数が、櫛の齒の抜ける様になくなるにつれて、全隊の統制は漸次に

破れて来た、もう誰が指揮してゐるかも判らなかつた。

先頭の指揮官はどん／＼倒れて、次々と新しい指揮者が先に立つてゐた。

只生き者の流れが、夥しい死傷を残しつゝ、ひたむきに上へ上へと登つて行つた。

光は黙々と中尉の後に従つて匍つて行つた。

愈々敵線に近づいて、山に登る攻撃力の流れが、色々の洲や間にせきとめられ出すと、大きな流

れは漸次小さな小流に別れて、岩間をくゞつては、そろ／＼と流れ出してゐた。

中尉は部下を顧みもしなかつた。

唯上を向いてソロソロと落ちついて、又ズンズンと勇ましく匍つて行つた、まるで何かにつかれ

た人の様に、

部下は皆無心にその後に残りて居た、この人に、この指揮官について行けば弾丸もあたらぬ、死にもしない、中尉が何かこう、必勝の信念といつた様な綱で、皆をグングン引きづり上げて行く様な氣がした、きつと勝てる、皆さう思つてゐた、口には出さなかつた、然し、皆一様に感じて居た。

光は中尉にびつたりとひつついたまゝ登つて行つた。

大きな大きな力に縋つて行く、御佛の慈悲の衣に抱かれて行く、そんな安心した氣持だつた、まはりには死者も出来、傷者も出来た、それが何だか、かへつて遠い處のこの様に感じられた、隣の山田も、その隣の石川も、前の小原もやられた、然し彼だけは死の神の訪れる風さへも見えな

つた。

山田がやられた時、彼は死の神が隣まで来てゐる様な気がした、しかしさして恐ろしくもなかつた。

来るときは来る、謝はるわけにも行くまい、一種徹底した諦めの境地だつた、山田の次に、すこし離れた左翼の清水伍長が虚空をつかんだ時、彼は何だか死が自分達のところだけ、来るのをいやがつてゐるんぢやないかと思つた、彼は何でもなしに一寸舌を出して見た。

『御縁あつたらまた来て御刺し』學校時代のざれ歌が口元まで出て来た。

彼はヒイと笑つた。

『お前えれえ度胸だなあ、俺あ一寸氣味が悪くなつたぜ』犬山が耳もとで囁いた。

弾丸はビュン／＼飛んでゐた、附近に落ちた砲弾が石のかけらを撒き散らしたが被害はちつとも

なかつた。

部隊は今屏風の様な岩かげに辿りついたのである。

十一

砲を出たときは中隊長を先頭に二百に近い固まりだつた。

『番號をつけて見い』

『一、二、三、四、五、六』

次々に番號は移つて行つた、二三分たつてからはるか下の方から、

『吉川中隊、最後尾はこゝ、四十七』

それは原山の聲らしかつた、傷ついてゐると見える、中で匂きつては叫んだ、さうつと側の方から

『八卷ツ八巻がゐます』

と喚く聲が聞えた。

『二十八は石濱中隊の東です』

『二十九も同じく榊藤』

『十七は三大隊の鶴木です』

皆暗に迷つた兵が紛れこんでゐるらしかつた。

あたりをまよまつた部隊らしいものはなかつた。

『貴島中尉はこゝだ、これから俺が指揮をとる、皆前にならつて動け』
凜たる聲だつた、平常の通り齒切れのいゝ聲だつた。

胸のすく様にすつきりした中尉の姿が中空にくつきりすかして見えた。
後は何も聞えなかつた。傷者の呻きが戦場にふさはしい、急調な、又神經をえぐる様な、かむ様な交響樂を奏してゐた、斜め右三四百の處に火焰、地雷だ、木ぎれや土塊がしばらくしてから落ちて来た。

『ゼエーン、ツアーン』何か叩く音。

『ウオツ』といふ聲、叫聲、怒聲、悲鳴、後は静寂。

山上から四つ五つ。

手榴弾だ、手投光弾だ。

地上をごろ／＼と二三轉すると青い鱗光があつた世の様な光りであたりを照した。

前方五六十の處に鐵條網が連なつてゐる、何か動いて来る、左上から二十名ばかりの一固まり、敵だ!!

鐵條網の影から四五名立つた、先頭は柳少尉らしかつた、頭上の大上段、先頭の二三名は、バタバタと倒れた。

影繪の戦争、ほんとの斬り合ひは、曾て見た劍劇より形がよかつた。

第一に敵味方の呼吸がびつたりと來てゐた、形の悪い方が先に倒れた。

少尉が正面に得意の極意劍、捨身の突きを入れたとき横合から銃の臺尻がガンと腦天を見舞つた

『打つな』中尉が光の手を押へた。

國を出るときは、敵愾心なんてものは全然なかつた、お互に兄弟なんだ、何の縁もゆかりもないましてや、恨みのない人達と、斬り合ふ、刻み合ふ、屠り合ふ、そんなことが出来るもんか、とのみ彼は思つてゐた。

しかし友達、さうだ友達だ、軍隊に入るまでは、まるで縁なき衆生の如く思つてゐた、人のいやがる兵隊さんに、さう思つてゐた、何か違つた出生の、別種の人間の如く考へてゐた、處がどうだ入つてよくつき合つて見ると、皆自分と同じ様な存在だつた。百姓の倅も、大工も、三助も、學生も、地主も、小作も、金持ちも、貧乏人もゐた。それがこゝに入ると、すべてが浮世の衣をぬいで各自が自己の能力によつて、職務をあてがはれてゐた、そして皆すべてを忘れて、公に奉仕してゐ

る、自分達よりも、もつともつと真剣に、もつともつと大きな犠牲を拂つて本気で働いてゐる。

自分達が、講堂で、研究室で、しゃべつてゐる間に、この人達は黙々と我々の爲めに苦役して居たのだ、外目には厳格だった、何か乾燥したカサカサの處見た様だった、然し實際は反對だった、各人はよく他人のことにまで關心をもつてゐた、涙もあり笑ひもあつた、あたりの厳格さに反比例して、それがピシ／＼と反映してゐた、でとかく感傷的に、感傷的にさへなり勝ちであつた、お互同志の手がまはりかねる時には、上から注意して來た、世話をやいて來た、冷やかな世間でそんなことは、一寸思ひもかけないことだつた。

それがこゝでは、厳格な假面を被つて、常時行はれてゐるのだつた。而も朝から晩まで、食ひも
のから、便所まで、一所にする。時々には中隊長が、

『我々は今迄、赤の他人だつた、しかし、かうして部下となり、上官となつて戦地へくると、もう他人などは思へぬ、俺が死んだ時、骨を拾つて貰ふのは、親でもなく、子でもなく、妻でもない、皆ななんだ、皆が倒れた時は我々がするんだ、どちらが先になるかわからん、頼むぜ』

なんて妙に述懐的に話した、内地でこんなことをきいたんでは、一寸大した氣も起らないだらうけれど、暮色が迫つて來て、だん／＼故郷が戀しい氣持ちになる、特に暇な時にだ、暇といふや

つが、こんな時には一番敵なんだ、そんな氣持の時に、かうしたしんみりした話をきいて、遙に友の死骸を焼くだらうところの、かすかな煙の上るのを見てゐると、妙にそこの人々が、恐ろしく親しい者に思へて來た。

男同志の交りのときのみ交される、雄勁な、深刻な、涙ぐましい感情が、一同を包んだ、かうして段々皆が、しつかりと、しつかりと、結びつけられて來たのである。

その友が、最も近い友達が、血族が、一人一人やられて行く、それを見てゐるうちに、何だか敵が憎らしくなつて來た。

俺は貴様達に恨みはない。

だから俺は貴様達を傷けたくない、唯靜かに俺は自分の死を待つてゐる。

いゝ氣持でゐた、名僧達識の悟道見た様な氣でゐた、それがどうだ、敵も悪意はない筈だ。

それなのに、近いものが、親しいものがバタ／＼とやられて行つた。

『何だあからぬ奴だ、けだもの奴、よしッその氣なら畜生ッ』

親友の澤田が、『仇をッ』と云ひながら彼れの手を握つたとき、ヌラツと澤田の血が光の手に傳はつた。

光の顔が、眼が、妄執を宿した。

少尉が倒れた瞬間

中尉が『打つな』といった瞬間、思ひ掛けない處から銃聲が轟いた、閃光がパツ／＼と連続した
輕機だ！

勝ち誇つた敵の二三、四五が將棋倒しに倒れた、光弾の光りが一段の光輝を放つたと思つた次の瞬間には、濃密な闇がすべてを包んだ。

月はもうなかつた。

十二

中尉は落ちついて部署をしてゐた。

『鐵條網の深さと破壊の程度』小林と堀田が云つた。

『壕の中、側防機能の有無状態』有村と市坪と田島が同音に復唱した。

『よし行けッ』

中尉は匍つて行つて一人々々に固い握手をした、それが今生の訣別のしるしだつた、鐵線鉄を腰に、劍帯にさして、圓匙を背にしよつてゐた、雜囊にはまだ手榴弾が三つ四つ残つてゐた、銃は持

たなかつた、動作の一寸でもぶくなるのを恐れたのである、又必要があれば、新しい、銃が、兄弟達の恨みをのせて、いくつもそこいらに轉つてゐた、黒い蔽いはもう皆なとつくにすてゝゐた。

しばらくたつたけれども何の答へもなかつた、光は中尉の顔を仰いだ、中尉のあごが一寸しゃくつた、それで充分だつた、光は黙々として匍ひ出した。

方々で呻き聲が聞えた、方々で聞えた。

然しそれがあつた方が、かへつて靜寂さを増した。

光が鐵條網に近づいたとき不思議な聲が聞えた。

鐵條網の枕をつかまへて誰か立つてゐる、それが歌つてゐるんだ。

『巖となりて』それは殆んど音律をなしてゐなかつた、然し君が代には違ひなかつた。

『苔の』後は續かなかつた、彼の姿がする／＼と腰を碎いた。

あれだけ歌つて、

最後の願ひだつたらう、皆唄はしてやりたかつた、さう思つた瞬間、そのほんのわきから、違つた姿がにゅ／＼と立ち上がった、よろめいてゐる。

『苔のむすー』一寸たつた、『まーで』

影ががったり伏せた。

『チャツアーン』金屬性の音が森閑を破った。

光はそろ／＼匍ひ出した。

小林と堀田が斃れて居た、二人の面上には只安らかさが見られた。

鐵條網の後は、深さ三間、幅四五間位の壕になつてゐた、こゝにも第一線勇士の生死とり／＼の

屍が横たはつてゐた、臭氣が鼻をついた。

もう半年前に護國の鬼となつた勇士達の骸はその儘になつて居たのである、いひ様のない鬼氣が

彼の膚を泡だたせた。

皆なその圍りに浮ばれぬ忠魂が迷つてゐるのだつた、皆友軍の來援を待つてゐるのだつた、

光がこゝへついた時、その魂たちが喜んで、啾々と泣いたのが聞えた。

味方の砲撃の爲めに壘壁はさん／＼に壊れてゐた、二三ヶ所、足が／＼のついた登れさうな所が

あつた。

先著者がそれにとつついたまゝ死んでゐた、市坪と田島はその一番上の壘に手をかけたまゝ斃れ

てゐた、有村はどこをどう匍ひ上がったか、身軀で壕側防用の機關銃匣を塞いだまゝ、ことされて

ゐた。

十三

聯隊長は軍旗と共に上つて來た。

旗手は高瀬少尉だつた、夕方出發のときの旗手は武富少尉だつたが、彼は己が鮮血にそんだ軍旗

を己が魂と共に鈴木中尉に渡した、同様にして鈴木中尉から蓮岡中尉へ、それから田中少尉へ、

變つて秦少尉へ、かくして彼れ高瀬少尉が今夜六人目の旗手として、今戦友の血潮のにじんだ軍旗

を捧持したのである。

彼は足と腰に弾丸を受けてゐたので、彼の當番と本部の佐藤曹長が、兩わきから抱へてゐた。

聯隊長は刀を提げて黙々と上を睨んで登つて行つた、軍旗が之に續いた。

少尉の傷はきつかつた、皆とめ様と思ひながら、物ともせず、山上を望んだまゝ、まじろぎも

せず上つて行く少尉の姿を見ると、どうしても云ひ出せなかつた、傷口から血がとつと／＼流れ出

るのが感じられた、力が段々ぬけて、足が白くぼうつとなつて行く様な氣がしてゐた、痛みは何も

感じなかつた。

軍旗の旗竿をしつかりつかんで、軍旗受けの方へぐつと押つけると、下腹のあたりから力がわい

て来た。

目は山上から、漸次竿頭にうつゝて来た。

夜目に、御紋章が美しく輝いて見えた。

後尾の軍旗大隊は始めは四角な固まりだった。

それが損害が出来るにつれて、軍旗を尖端とする三角形に變つて行つた。

然しこの大隊は前の二個大隊の様に小流には別れなかつた、上に行く程、人がへつて、もとの大隊の固まりは段々小さくなつた。

然しそれは却つて軍旗の下に固い固まりになつて行つた、この大隊で落ちた者はほんとうに動けない者だけだった、いやしくも、匍へるもの、いざれるものは皆助けあつてついて来た、で上方、軍旗のすぐ近くの三角は濃密だったが、後の方になるにつれてまばらな尾をひいてゐた。

第一線大隊の大部は途中で止まつてゐた、動けない者が大部だった、しかしどう進んでいゝかわからずに、ぐづぐづしてゐるのもあつた、進むことも退くことも出来ずに、死傷者の間にもぐつてゐるのも居た。

『軍旗だ、軍旗の前進だ』それからそれへとそのさゝやきが受けつがれた、皆其の方を向いた。

兵は皆匍つて居た。

唯聯隊長と旗手とそれを抱へてゐる二人だけが立つたまゝだった。

旗竿は山嶺をさしてゐた。

軍旗は静かに静かに進んで行つた。

拒否し難い力に惹かれて、皆後に従つた。

こゝで三角がまた大きくなつた。

そここゝから將校や下士や兵卒が眼をかゞやかして集つて来た。

いよゝ後につけなくなつたとき皆萬歳と叫んだ。

『天皇陛下萬歳』

『大日本萬歳』

さういつた叫びが方々に聞えた、上に行くに従つてその聲が増した、それはもうこれで俺はついて行けぬ、後を頼むといふ意志の表示だった、皆家のことも、子供のことも、戀人のことも、妻のことも、父のことも、母のことも云はなかつた、まして會社だの、店だの、貸だの、借だのつてことは何も云はなかつた。皆一様に考へてはゐたのだつた、然し愈々死に移る瞬間にはさう叫んだ。

『天皇陛下萬歳』と、恰も兵士があゝの世に通る手形の様に、恰も云ひ合した合言葉の様に。

光弾が二つ飛び込んで来た。

一つは軍旗の約五十米も前に、一つは三角の真中に。

空中に懸る光弾は恐くなかつた、然し地上に落ちて鱗光を噴く光弾は厄介だつた、その明りであたりが明瞭に見えた。

聯隊長も軍旗も殿として動かなくなつた。

再び思ひ出した様に戦場が賑やかになつた、正面の壘からはもう最初の様には弾丸がこなかつたしかし諸砲壘からの十字火は中々に凄じかつた。

行田軍曹はふと我れに返つた、隣には見知らぬ傷者が呻いて居た、自分には黒い蔽ひが三枚もかけてある、一度死んでゐたんだな、と思つた瞬間上の方で『バアツ』と光弾の光り、キラリ、軍旗だ。

弾雨の中に毅然として立つてゐる、彼はひよろ／＼と立ち上がつて二三歩するとがたり倒れた左腕と腰が半分なくなつてゐた。

部隊の真中に飛び込んだ光弾は、即座の機轉でわきの兵がありあはせの土囊をかぶせた。三四の土囊が送られたとき、光弾は大體におしかくされてゐた。

も一つの光弾は尙旺んに燃えてゐる、誰かど走つて行つて足で踏みにぢつた、けつた、光弾はころころところがつて、もつとよく燃えた、それが今井の側にころ／＼と来た。

『引き受けた』漸死の今井は、それを己れの腹の下にしいた、その隣にゐた傷兵がそれにかぶさつた。

再び闇。

遙か下の方で凄惨な聲が尾をひいた。

『中隊長殿ッ！行田も、行田も行きますゾウツ！』

軍旗は遂に貴島中尉の位置まで来た。

『正面に、鐵條網の破壊坑、幅三米、通過容易、鐵條網の直後に壕、斜右よりに壘壁崩壊、登攀可能、側防機能すべて閉塞、壘上には残兵殆んどなし』

光は復命した。

中尉は涙を一杯ためて黙つて光の手をしっかりと握つた。

それは無限の感謝の表現だった。

『しっかりと兵ぢや、功績拔群、曹長書きとめておけ』

要領を得た報告に隊長はひどく満足だった。

聯隊長は振りかへつて一同を見た。

聯隊長の側に、かつてのあの老中尉が、物々しさうに控へてゐた。

『戦況は如何でござる』とでも云ひ出しそうな顔附きだった。

隊長は静かに立ち上がった。

しかし高瀬少尉はもう動けなかつた、彼の口が何か云はうとしてゐた、貴島中尉が耳を彼の口に

よせた。

『軍旗を』

中尉はうなづいた。

『六人目高瀬少尉』それだけいふと、彼は面を、空に、竿頭に、振り向けた。

彼の精根が、すうつと竿頭に吸ひつけられた時だった。

彼は旗竿をしっかりと握つたまゝ、眼に軍旗の影を宿したまゝ死んで行つた。

『七人目貴島中尉』中尉は口の中で己れに云つた。

隊長は一度刀を上挙げて、進め／＼をした、そして静かに歩み出した。

貴島中尉が之れに續いた、老中尉が之れに續いた。

これを先頭に三角が前進を起した。

止まつてゐる間にまいつたと見える。元氣でついて来てゐるものは百人に満たなかつた。

鐵條網の破壊坑を通るとき、光は小林と堀田の姿を中尉に示した、中尉は黙禮した、軍旗がガタリ

と大きくゆれた。

鐵條網の向ふに柳少尉が死んでゐた。

大尉は自分の刀をしようとした、そしてつか／＼とよつて、彼の刀を取つて歸りがけに、一寸片手で拜んだ。

彈丸は正面からは一發もこなかつた、敵も皆死にたへてゐたのである。

軍旗は黙々と壘上にあつていつた。皆一言も云はなかつた。

無言の進軍。それが一層凄惨さを増した。

萬歳を叫ぶにはあまりに凄惨な氣持だつた。

『軍旗を壘上に立てよ』

中尉は黙々として砲塔の上に立つた。

空には星が瞬いてゐた。

十五

壘を占領したら信號彈、赤、青、緑の吊星を打つ約束だつた。

壘を取つた、軍旗は今壘上に立つてゐる。

知らしてやりたかつた、これだけの犠牲、半年間のこれだけの犠牲に對しても、内地に首を長く

して待つてゐる全日本の國民に對しても、しかし信號彈を持つた兵は一人も來てゐなかつた。恐らくは皆途中でやられたのであらう。

壘の奪取と同時に壘の向ふ側にはすぐに斥候が出されてゐた。

點々とまばらに然も水も漏らさぬ手配であつた。

新見は一人岩蔭に身を潜めてゐた、そこからはすつと下の方に、要塞の灯がチラチラと、はつきり美しく見えた。

『要塞だ、明日はとれる』さう思ふと何だか、目頭が熱くなつてきた。

突然チラツ／＼と町の火が明滅を始めた、

『燈火斷續するは敵あるなり』初年兵のとき習つた文句がはつきり念頭に浮んだ。

がや／＼と人聲、ガチ／＼と靴音、敵だ！而も相當の部隊だ、増援だ。

而も奴さん達、壘が吾手に入つたのをまだ知らぬらしい。

岩陰にやもりの様にへばりついてゐた新見はいざり出した。

逆襲ッ！ と叫びかけて、あわてゝ口をおさへた、敵はまだ氣づいてゐない。

こゝで大聲で敵襲を報告しようものなら、士氣に關する、これは今迄彼が野外教練の時に、耳にたこの出来る程きいたことだつた。

彼はこけつまろびつ走つた。

『この方向、二百名ばかりの敵、こちらに向つて、ハツ知らずに來ます——』

彼は隊長の耳にさうつと囁いた、が隊長には、それでも相當大きく聞えたとに違ひない、然し隊長は左あらぬ態で沈痛な口調で命じた。

『同胞八千萬の希望と、戦死十萬の遺死によつて、我等は明朝までこの地を確保せねばならぬ、敵もこの高地の爲めに多大の犠牲を拂つてゐる、猛烈な恢復攻撃を豫期せねばならぬ、斥候の報告によれば、この壘下まで約二倍の敵が來てゐるとのことだ、皆んなこゝを墳墓の地と思へ、いゝか速かに位置につけッ』

間髪の際もない的確な指揮だつた。

皆の頭には、今操典も、要務令もなかつた。

全智全能を盡してやる、愚論でも、拙法でもいい、目的は此壘の確保だ。

皆ベストを盡してゐた。然しこれがかへつて、操典要務令の忠實なる遵奉だつた、獨創新規、さう思つて皆がやつてゐることが、悉く原則にあてはまつてゐた。

『タン~~~~~ポツーンシューーン』

彈丸は靈あるものゝ如くに飛んだ。

『ウオツウアツ』怒聲とも、叫聲とも、悲鳴とも知れぬ奇聲をあげて一度は敵が潰走した、我が不意打が奏功したのである。

我等の壘に敵がある、壘がとられたんだ、あの半歳の苦闘によつて、あの夥しい犠牲によつて、死守してゐた壘が、それはまだいい、此壘をとられたら……要塞の死命を握つてゐるこの壘がとられたら、逆襲ッ！ 敵も勢ひ蹶起せざるを得なかつた、こゝに猛烈、凄絶な彼我の白兵戦が行はれ

たのである。

敵もなかくに、けなげだつた、決死の勇を揮つてゐた、味方はもう死身になり切つてゐた、必死だつた、死戦、死力を盡しての戦ひ、それが今行はれてゐるのである、突く爲めの銃剣が、いつか逆手に握りかへられてゐた、刀が折れた、圓匙にかへた、銃が割れた、棍棒が握られてゐた、彈丸が盡きた、石を投げた、腕が折れた、齒が最後の武器となつた、物凄い戦ひだつた、隨所に黒闇の中に肉弾相搏つ一騎打があつた。

敵は味方の三倍位だつた、それに新銳の精兵だつた。

敵諸壘が再び一齊に砲火を開いた。

地の理はよく知れてゐた、萬一のとときの恢復攻撃も準備がしてあつたんだ、敵彈は的確に來た、そして敵味方、白兵戦場の勇士等は、相組んだまゝびし／＼と敵陣にさらはれて行つた、友軍の砲も遙後方で呻り出した、然し彈丸は皆壘上を越して遙に飛んだ、一部は鐵條網のあたりに落ちて、徒らに友軍の戦傷者を苦しめた、味方の勇士等は一人一人傷いて斃れた、心は逸つてゐたが、身は

金鐵ではなかつた、味方の重機も殆んどつぶされてしまつた、敵は尙増加の勢ひがある。

『誰か敵砲を使つて見ろ、どうでもいい、動かしてゐるうちに彈丸が出るに違ひない、敵の自動火器はないか』

隊長は必死に叫んでゐた。二三の敵砲、三四の敵の重機が最強の我が武器として使用された。敵の増援隊にはこれがひどく無氣味だつた。

『ゴツガチャツカチツ』

そここゝをいぢりまはしてゐるうちに、うまく打ちあけると『ズドン』と彈丸が出た、その反動で二三名が血を吐いて斃れた、盲うちでも相當脅威の效はあつたが、もとより狙ひはついてゐない音は遂に敵を阻止し得べくもない、切齒扼腕の其折も折、

『村田砲兵少佐が應援に來たぞ』

『吉田砲兵大尉』

『霜川中尉』

『丸山少尉』

『三島少尉』

大聲に呼ばりながら、疾風の如く數名の壯漢が躍り込んだ。續いて三四の下士卒が喚きこんだ。

『隊長！ 隊長はどこだ』

『軍旗はこゝだ』

聯隊長が躍り上がつて叫んだ、永く外國に遊んで、射撃の神技を讀へられてゐた村田少佐だ、それに續く帝國砲兵將校中の尖銳だ。

援軍來、僅か數名の來援でも、この際、この叫びだけで百萬の力だつた。

『明拂曉の爲めの軍の射撃觀測必死班です、が、宜しい明日はどうかなる、各員、敵砲によれッ』
石火の命だ。

十六

敵砲は敵を薙いだ。

零分晝に切つて打つ、砲口の前で彈丸が炸裂して敵を薙ぐ、それは敵が近く我に迫つたとき、我れを守る砲兵の最後の手段だ、さう思つてゐた、さう習つては居たが、まだ自らやつて見たことはなかつた。

『グワツ！』四邊を壓し、すべてを振盪し、風靡する火砲の勢ひは物凄かつた、少佐は砲から砲へ何かと若い將校に教へてまはつた。

『糧に敵による』それは孫子の夙に云つたことだつた、しかしそれは不磨の金言として今も兵家の常に誦する所だ。

『毒を制するに毒を以てす、我國は曾て新渡來の佛教を克服するに、日本の佛教を以てした、儒教を御するに、日本の儒教を以てした、南蠻渡來の吉利支丹に對するに、日本は日本の基督教を以てした、資本主義についても、軍國主義についても、さうだつた、西歐社會主義に對する、宜しく日本の社會主義によらねばならぬ』

それが少佐の持論だつた、それは敵のよきものをこなして、我が爲めに使ふといふことだつた。

『敵砲は敵を薙いだ』敵弾は我が魂をのせて敵を傷けてゐた。

少佐は今、其生の最後に當つて、其の持論の實驗をしてゐたのである。
先の程まで勇敢に友軍を葬つた砲、それが今は我手に容捨なく敵を葬つてゐた。
少佐は會心の笑みを洩らしてゐた。

生き残りの工兵は、敵壘内の彈藥庫から、爆藥をもつて來ては投げた、愈々自らが動けなくなつた時、火藥をいだいたまゝ敵中に飛び込んだ、日本兵にのみ見られる勇敢さだつた。

味方はよく戦つた、實によく戦つたが、所詮は多勢に無勢だつた、逆襲につぐ逆襲、増援につぐ増援、敵勢は執ねく盛り返して來た。

前線は逐次におされて來た、敵の包圍圈が、漸次せばまつて來た。

一度は中央壘上に立つた軍旗、それも、今は壘壁の後端まで押返されてゐた。味方も敵も算を亂して倒れた、敵は死に當つて神の名を呼んだ、戀人の名を口にした、しかしこの時の味方は、皆眼をむいて死んでゐた。

軍旗がこゝにある、我々は死ぬわけにゆかぬ、皆おされながらにさがつて來た、霜田大佐は身に數箇の貫通銃創を被つてゐた、息がまつて來た、血の塊りが、くわつと胸元をついて上がつて來た、安田軍曹が支へてゐてくれる、それはわかつてゐた、壘壁にもたれたまゝ、うつろな息で烈しい争闘を見てゐた、然しその安田軍曹の方は實はとつくにことぎれてゐた、今井がやられた、税所が倒れた、南も傷いた、右の砲塔が爆破した、我が防禦線がちり／＼と縮つて來る、もう三十米で、二十米で軍旗だ。

『隊長!! もう死んでもよろしいかッ』

瀕死の聲が苦しげにあえいだ。

『よく戦つた』

兵はそれをきいてことぎれた、しかし大佐は死ぬにも死ねなかつた。

立つて動けるものだけが防いでゐた、いよ／＼立てなくなつたものは、軍旗のまわりへ匍ひもどつて來た。

肉體の力が盡きたとき、ヒユツと慧星の様に尾をひいて魂が軍旗の竿頭に飛んで来た、その度に軍旗がきらりと輝いた。

(60)

中尉は軍旗をしつかりと握つてゐた。

軍旗の圍りに動けるものはもう十四五名しかゐなかつた、老中尉は一步も軍旗の傍を離れなかつた。圍みを突いて飛び込んで来る兵は皆斬られた、中尉も片手なぐりに鮮かな斬れ味を見せてゐた。

『中尉殿ッ！ 後は引き受ける、危険だ、退つてくれッ』

斬り結びながら、木越特務曹長がわめいた。

『軍旗は退らぬ、全員の死と共に、軍旗がなくなるのは名譽だ、一兵のある限り最後の血までこの爲めに流せ』

痛烈な叫びだつた。

『兵が少い、危険だ、軍旗ッ、ウツ！』

『馬鹿ッ！ 戦死幾千の生靈が旗についてゐるんだ、萬人の力が負つてゐるんだッ』

それをきいて隊長がガクリと落ちた。

片手に軍旗を、片手に長刀を振る中尉の姿は、繪の様に美しく阿修羅の様に物凄かつた。

力がむく／＼と出て来た。

『ウオツ』野獸の様な叫びと共に光が突進したのと、老中尉が奮迅したのと同時だつた、敵も幾分たじろいだ、敵の援兵も盡きた、今や互角だ、十數の影がヒヨロ／＼と相搏つてゐた。

『立花ッ』『光ッ』

中尉の聲だ、中尉は喉を押へてゐた。

『立花ッ！ 俺は死ぬ、貴様に軍旗を托す、今こそ貴様は立派な日本人だ、いゝか、何萬の精靈がついてゐるぞ、俺もついてゐるぞ、頼む、ウツ！ 七人目貴島中尉、ウーム立花、軍旗は天皇だ、

軍旗は天皇だ、ウウツ、天皇は天皇は日本の軍旗だ、萬ざーい』

後は何をいつてゐるかわからなかつた、時々軍旗軍旗といふ聲がきくとれた。

光は始めて軍旗の尊嚴を知つた。

(61)

死に瀕しつゝ叫ぶ彼等の聲、そこには生死を超越した、或力がありはしないか。ありとすればそれは何か、皆が血を以て、死を以て守る此の旗はなんだ、生きては生を賭して守り、死しては魂を止めて守らむとする。

『八人目立花二等兵』光は己れにいつた。

二等兵だ、俺は立派な二等兵だ。

その瞬間、

『ビュッ』流弾が右肩を通つた。

光は身体で旗を抱いた。

竿頭の御紋章だけが燦然と壘上に輝いてゐた。

老大尉と安藤が、二人残つて、涙ぐましい最後の奮戦をしてゐた。

安藤が杖にくくりつけたロープを、身体でひいてゐた、それにかゝつた兵を、老大尉が斬つてゐた

『ビュッ』と流弾、大尉が倒れた、柳少尉の刀をしつかり握つたまゝ、で、安藤が大尉の脊の刀をとつた、一人が綱にかゝつた、安藤が身体ぐるみ突いて行つたのと、敵が倒れながら短銃の引金をひいたのと一緒だつた、二人は折り重なつて斃れた、一人の敵が銃を逆手に襲ひかゝつた様な気がした、ガンと来る筈だつた、光はそれきり覚えなかつた、が、敵は貴島中尉に足をとられたまゝ、へたばつてゐた。

砲兵の勇士等も皆斃れてしまつた、只失明した三島少尉だけが、手探りで盲ら打ちをしてゐた、見よ、凄絶なる戦場の残花一輪!!

『少尉殿! 電話機、電話機です、少尉殿通じます』

兵はそれつきり、がつくり逝つてしまつた。

少尉は送話機をとつた。

『壘は占領した、軍旗がある、味方は皆斃れてゐる、敵の逆襲が危険だ、弾丸で、弾丸で防いで呉れ、何目標ツ? 今照明弾をたく、それを目あてに打つてくれ、俺をツ、俺も一緒に打つてくれ、ええッ躊躇する時でない、俺が目標だ、打て打てッ!!』電話機がガン／＼なつた。

砲兵陣地で、それを受けて居たのは、三島少尉の中隊長だつた。

『三島ッ!! 許してくれ、一緒に打つぞ、三島ッ』

聲淚共に下るとは、全くこの時の中隊長の様子を形容する爲めの言葉だつた、少尉は兵の雜糞から、光弾のいくばくをつかみ出した。

間もなく山上に閃光が輝いた。

數十の砲火が一齊にそれに向いた。

軍司令部と、砲兵との、電話連絡はきれてゐた。

急使が悍馬をかつて、暗の野路を軍司令部に向つて疾駆してゐた。

光は烈しい閃光にハツと我れに返つた。

正面に簇々たる敵兵、右手の砲塔に、光弾を背に閉鎖機を執る、美しい少尉の姿

身體はもうきかなかつた。

『奴ッ』もう敵意を表し得るのは眼だけだつた、彼が滿身渾身の精を集めて『ハッタ』と敵を睨み
すゑた瞬時。

『グワツグワツグワツグワツ』萬雷の音だ。

音一しきり、敵はきれいに拂はれてゐた。

敵砲も、少尉の姿も、電話機も、影を止めなかつた。

輸卒俊夫が、踰越として赤、青、緑の吊星をあげた。

恨みを残して逝つた、若き信號兵の望みが、俊夫によつて達せられた。

四邊は既に明けかけてゐた。

師團の他の方面の攻撃は皆壘前で止められてゐた。

十七

再び軍司令部

全隊、皆部署についてゐた、山麓までつめてゐた、蜿蜒幾十軒、野を越え、谷を渡り、山を廻つて、皆肅然と待つてゐた。

攻撃前進の合圖には、砲兵が大小幾多の砲を連らねて、爆音による『君ケ代』を奏することになつてゐた、挺身軍に従つた、樂壇の重鎮近衛耕作氏が、指揮棒を執つてゐた。

飛行場には、全機が翼を連らねて、發進命令を待つてゐた。

飛行隊長は、今すべての部署を終つたとこだつた。

『俺あ、L號飛行船にぶつかるとだ』

『俺あ、N式を二機たゝき落としてから、飛行場に暴れ込むんだ』

『俺達あ、敵の本營と情死だ』さう最後にいつたのは加藤大尉だつた。

この會話でも知れる様に、隊長は常套戦法をやめて、愈々最後の肉弾戦法をとつたのだつた、我が肉を斬らせて敵の骨を斷つ、我が骨を斷たせて敵の死命を制す、これは決して野蠻時代ばかりの戦法とはいへなかつた。

いかに兵器が進歩しても、最後に其威力をして光輝あらしむるは常に人の力にあつた。

『點火』『壓縮ッ』機關士はしきりに機關を整調してゐた。

東天がわづかに白んで來た。

將軍は幕僚を従へて戦線の中央に立つてゐた。

『報告は來ないか』

『ありません』

『砲聲も銃聲もやんでしまつた』

『斥候は一人も歸らぬ』不安な會話が幕僚の間でとり交されてゐた。

果然、山上の照明、我砲兵の猛火、

『おいッ、砲兵隊と連絡をとれッ、何か變つたことがあつたのかッ』

『故障、電話不通』

通信兵は油汗を流してゐた。

明るくなりかけた、一同の眼鏡が期せずして、眼に、そして壘へ、珠靈山へ、

『皆、壘にとつゝいて居ます、成功です、眞黒になつて伏せてゐます』

『壘上にも何か見えます、少しは上にも上れたと見えます』

『おい、ちつとも動かんぢやないか、やつ、やられてゐるんぢやないか』

不安が一同を引つ包んだ。曉霧一時に霽れ朝日が出んとしてゐる。

途端キラキラと輝き出した光輝、参謀長が叫んだ。

『壘上の輝きは何だ、回光通信か』

『軍旗だツ!! おい占領したツ』

『ドレ、ウン勝つた』

萬歳!! 全線が之れに和した。

『おい軍旗が動かぬぞ全滅ぢやないのか』

途端、壘上に約束の吊星、珠靈山占領!!

『ウワーツ』歡聲は山野をゆるがした。

憂々の響き、砲兵傳騎だ

『壘上、三島少尉より電話報告、壘は占領、霜田聯隊全滅、壘上には軍旗だけ、來援を待つてゐま

すツ』

果せる哉、軍旗は精靈だけで守られてゐるんだ。

『霜田聯隊の忠死を意義あらしめねばならぬ、軍旗を敵に渡してはならぬ、

即刻、全軍總攻撃開始ツ!! 押川將に老軀を君國に捧ぐるの時節制來ぢや。

砲兵に通報、攻撃開始、發進ツ!!』

軍司令官自らが刀を執つて陣頭に進んだ。

『ドーン』『ドーン』『ドーン』『ドーン』

砲による君が代だ、機を見ての獨斷、砲兵は逸早く、全軍に勇壯極まる攻撃を合圖した。

耳を聳する爆聲、空には空軍の總出撃。

股々たる砲聲、地には地軸をゆるがす全火砲の猛撃、砂を蹴り、巖を嚼んで、人の激浪は山上目掛けて揉みに揉んで進んで行く。

要塞の上空には、Z型航空船數隻を中央に、敵空軍が勢揃ひをして待つてゐた。

先頭の一機、二機、三機、機首を正面に向けたまゝの猛攻、こちらが敵弾を受けるのと衝突とは間髪を入れなかつた。

情死戦法、敵は捨身だ。

死ぬ氣の戦ひにもやはり氣味の悪い敵はあつた。

『危いッ』反轉逆轉、敵機は列を亂して潰走し出した。

わが隼敏な戦闘機が鈍重な敵の航空船と情死した、F偵察機が、破れかぶれの大暴れに敵飛行場を薙ぎ廻つて、遂に重油タンクに突撃した、眞黒な火煙がもうもうとあがつた、あたりは火の海と化した。

加藤大尉を長とする數機が、錐揉み横轉逆轉と、秘術を盡して、巧に地上對空射撃の火網を潜り敵本營の頭上近くに肉迫したとき、敵本營の屋上に白旗があがつた。虎穴に投じて、虎兒を得た攻

撃機は、辛うじて機首をたてなほすとなほも威嚇的に低く旋回をつゞけてゐた。

歩兵の全線は悉く山上に達した。

勝つた、勝つた。歡聲は山を越え、野を互つて、遠く遠く傳はつて行つた。

十八

將軍は光の擁する軍旗に、恭しく擧手の禮をした。

軍旗を中央に皆同じ枕に斃れてゐた。

軍旗は光が持つてゐた、然し其の旗竿には無數の手が、そのまわりには幾多の屍が、棒倒しの棒を圍んだやうにとつゝいてゐた。

將軍は涙と共にいつた。

『皆よくやつた、よく守つてくれた、お前達の死は日本八千萬の命を救つたぞ』

幕僚も並居る將士も、おい／＼と聲を放つて泣いた。

戦友は皆死んでゐた、光だけがまだ生きてゐた、そして囁言の様に

『軍旗は天皇だ、天皇は軍旗だ、軍旗は天皇だ、天皇は軍旗だ』と痙攣的にくりかへしつゝ。

將軍は砲塔の上になつて戰場を眺め渡した。

半歳の攻圍に山形は全く異つてしまつてゐた。

「俺は死にたかつた、人の兒も、俺の子も、共に殺した、大きな、大きな尊い犠牲だつた、一將功成つて、萬骨枯るといふ、功成つたとて、今の自分に何の喜びぞ、然し一將功成るときは、萬骨共に生きる日本の國は幸せぢや」

日が射して來た。輝かしい朗かな朝日だつた。

眞赤な美しい朝日だつた。

十九

今日は聯隊が、軍旗が歸つて來る日だ、凱旋して來る日だ、勇ましく出ていつた人達、それが今日果して、幾人歸つて來るだろう。

色々な立札が立つてゐた、各々そのわきに列んで待つてゐた、歡呼の聲が絶えなかつた、皆泣いてゐた、が、皆笑つてゐた。

光が、親子や、綾子に導かれて來た、軍服姿だ、胸間に、燦然と金鶏が輝いてゐた、皆一齊に道を開いた。

「光さんだ、町の名譽だ」

目ひき袖ひき、讚美の聲が、それからそれへと傳はつた。

今日は父自らが何かと光の面倒を見たがつてゐた。

光はもとの様な、美しい顔をしてゐた、優しい顔をしてゐた。

然し、輝かしい彼の聰明を表してゐたあの美しい眼は、爆煙にその明を奪はれて、堅く鎖ざゝれてゐる。右手、あの彈丸の通つた右手、それがきかなくなつてゐた。

押川將軍が、軍旗をお迎ひに來て居られた。

赫々たる名譽の將軍である。然しなぜか、力なげに、面はゆげに、ひどく恐縮して、小さくなつて居られるかに見えた。

將軍は第一に、戦死者遺族に挨拶して廻られた、次に戦傷者を見て廻られた。

光の手を握つて、無言で涙を流された。

『お父ちゃん、今日歸つて来るのねえ、お母ちゃん』
有村の子だ、父の死を知らしてないのだ、皆面をそむけてゐた。涙を見せまいとしてゐた。

花火が冲天に鳴つた。

『萬歳ッ！』『萬歳ッ！！』『萬歳！！』

肺肝をしぼつて、ついて出る聲だ、怒濤の様な聲だ、この萬歳を稱へたいばかりに、叫びたいばかりに、あゝそも幾何の犠牲なりしぞ。

どよめきが静まつた。

『軍旗はどこだ、軍旗に向けてくれ』

光はもう息をはづませてゐた。

『あれ、こちら、あの廣場の臺の上、今、軍旗が上りました』
光は見えぬ眼を睜はつた。

命をかけて守つた軍旗だ、肉眼で見えずとも、心眼には明瞭に見えた。

『おゝ軍旗だ、懐かしい軍旗だ、生命にかけて守つた軍旗だ。おゝ聯隊長がゐる、貴島中尉がゐる
吉田が、小林が、堀田が、有村が、みんなゐる、むらがつて、あゝ、あんなにゐる』

『お父ちゃんもゐるの』

有村の子がきいた。

『ゐるとも、あれ、皆な笑つてゐる、泣いちゃあゐないよ、坊や、坊やのお父さんは、あれ、一番
軍旗の近くにゐるよ』

『捧げ銃ッ』と聯隊長の號令、喇叭足引きの吹奏、鏗然、聯隊全員の捧げ銃、銃緋三千の眼が、マ
ジロギもせず一點に集まる、おゝ聖なるその瞬時、すゝりなきの聲、嗚咽の聲が、そここゝに聞こ
えた。嚴肅壯嚴なる感激の渦の真唯中、驚くべき静寂の瞬間、光は敬禮しようとおせつてゐた、奇
蹟が行はれた。

不思議！ 光の眼が見、手が動いた。

おゝ眼が、手が、狂喜する光の聲が静寂を破つた。

夢

秀嶺富士の麓に宮城があつた。瑞雲がたなびいてゐる。光はどこからどう来たか、わからなかつた、ぼつこりと来てゐたのである。富士の山を廻り、宮城を包む瑞雲に乗つて、神々がむらがつてゐた。一度もあつたことのない人達だつた、しかし中央が天照大神、その右が神武天皇、どれが清原、どれが誰れと明瞭にわかつてゐた、夥しい神々だつた。遠くの神々はほうと形だけしか見えなかつた。しかしその一人々々が誰れだか、はつきりわかつてゐる様な気がした。

『子孫光が参りました』聲だけがした。

神々が一齊にさしまねいた、光は行かうと思つたけれど、どうしても足が、身體が、ちつとも動かなかつた、その中に兄の姿が見えた、貴島中尉が出て來た。

『兄さんッ』さういつたひようしに夢が破れた。

夕日が落ちようとしてゐた。

『立花昭之墓』木の香が、まだあざやかに香つてゐた。

光の眼が俄に輝き出した。

『さうだ、今こそわかつた、兄さんわかりましたよ、兄さんの御言葉が、

おゝ今こそ中尉の言葉の意味がわかつた。軍旗は天皇だ、軍旗は天皇だ。

然し、天皇は、天皇こそは、天が日本國民に與へた軍旗だ、さうだ、天が日本國民に與へた聖戦使命の遂行の爲の、永遠にして唯一本の軍旗だ。

この軍旗の下にこそ、眞に聖戦の意義がある。

さればこそ、さればこそ、我等が祖先は生を賭して守り、靈と共に我等に傳へたのだ。目が見えぬ間に、俺は日本のほんとうの姿を見た、今こそすべてがわかつた。嘗ての俺は、疎忽にもその軍旗を忘れてゐたのだ、それなしに聖戦を策してゐたのだ。

嘗て俺の描いてゐたあれは決して空想ぢやあなかつた、こんどはきつとやつて見せる。

俺の研究が役に立つときが来た、今こそ何の不安もない、軍旗を奉じて敢然と萬民の幸福へ向つて進むのだ。

朗かな日本!! 祖國日本!!

おゝ、あくがれの美しき皇國よ。

御身の眞の姿に接するの日が愈々やつて来たのだ。

先輩や戦友は皆『後を頼むぞ』といつて死んだ、國を愛するが故に喜んで死んで行つた。

愛國だ! 愛國だ!! が、俺は今に全世界に向つて、この二字の眞の日本讀みを教へてやる。

愛の國だ!! 慈悲の國だ!!

世界萬民が、我が皇國を愛の國と呼ぶ日、慈悲の國と仰ぐ日、我が皇師が、天使の如く四方に迎へらるゝ日、世界が一つの家となり、我が祖國日本の聖戰の軍旗が、全人類聖戰の軍旗として、その先頭を萬民の幸福へと進む、皇國生命の擴充だ、あの夜の攻撃の時の様に、皆が一つの目的に向

つて心を戮せ、力を協せて、軍旗を先頭に、ひたむきに、上へ、上へと進むのだ。

軍旗の威靈が、我等を導いてくれる、きつと出来る、いやきつとやつて見せる。

俺の行くべき道もなすべきことも、おゝ、すべてはつきりとわかつた。

おゝ、この全身に漲り渡る力はどうか、身體の髓から湧き出づる、この充實した力、これぞ

神の力だ!! 聖の力だ!!

これと同じ力が日本の髓の髓から湧き出でた時、おゝ、その時こそ、眞の皇國日本の姿が顯現するのだ。

吾等が聖戰の軍旗、聖天皇を戴いて混沌の世に推し進むべき日が来た。

進軍の譜は、早やそここに、高らかに奏せられてゐる、混沌を透して、前途には赫々たる光芒が見える。

前進だ!

人類聖戰の突撃隊は早や組織が出来てゐる、今は只精神を吹き込むだけだ!!

そして今や、その突撃隊が猛然敢然と進軍を始めるのだ!!

前途に横はる幾險難、おゝ、これこそ男子試練の、よき障碍ではないか。

いざ起たう、いざ蹴散らさう!!

中尉殿！ 兄さん！！ 光が、光が、きつと、きつと御遺志をつぎますぞッ！！」
宵闇がいつの間にか匍ひよつてきて、嘗て戦場で見たあの眉の様な月が中空に懸つてゐた。

あとがき

筆者は一介の武弁である。

故に別に高尚な學理も該博な知識も持ち合せては居らない。然し一日本人として、特に祖國愛に燃ゆる一青年武官としての正氣と雄圖とは人並に持つてゐる積りである。

筆者は嘗て某聯隊に旗手として、一年間、軍旗捧持の任に當つたことがある。

捧げ銃と聯隊長の號令——喇叭足引きの吹奏 鏗然、聯隊全員の捧げ銃。

緋緋三千の眼が、まじろぎもせで、一點に集まる、打ち仰ぐ軍旗竿頭、菊花の御紋章は、燦として此の世ならぬ、神さびた光りを放つてゐる、風慘雨虐幾十度、重なる名譽の征戰に、色は褪せ、旗の姿は古り、かしく人は變りたれども、

おゝ、見よ、炳焉たる其の威靈！！

一秒、又一秒、驚くべき靜寂の瞬間である、涙が泌み出た、何事の在しますかは知らざる所の涙

だ、目が、すんで來た、涙を透して、茫つと遠くに光輝が見える。

夢か、夢にあらず、現か、現にあらず。無思だ、無我だ、忘我だ、さうだ、眞如の瞬間だ、僕は見た、竿頭に簇る將卒を。

僕は感じた、磅礴する軍旗の生命を。

さうだ、僕は心の髓までそれを感じた。

昭和三年、大統を承がせられたる我等の若き陛下が、老杉森々たる中を、神ながらの伊勢大廟の大前に進ませらるゝを仰いだ時。

實際自分には人の世のことゝは思はれなかつた。

素晴らしい感銘の瞬間であつた、

筆も舌も及ばない、

只感じるより外に表はし様のない瞬間だつた。

8. 11. 20

8. 11. 20



昭和八年十一月九日印刷
昭和八年十一月十日發行

手書

版權所有

著者	田吉	發行所	株式會社 東洋印刷株式會社
發行者	株式會社 中軍	發行所	株式會社 時事新報社
右代表取締役	川邊喜一郎	印刷所	株式會社 時事新報社
印刷者	井正幸	印刷所	株式會社 時事新報社

定價金拾錢

血の叫び終

僕は見た、陛下を廻る祖宗の姿を。
僕は感じた、磅礴する祖國の生命を。

僕は嘗て、かく感じた、強く、強く感じた。而も尙、其の感じが胸奥に強くやきつけられてゐる。一生に一度感じ、又二度と感じ得られぬ感じの瞬間であつたらう、僕は幸福だつた、其の法悦の瞬間、僕は又、僕の生命をも強く感じた。

『聖なるもの』ほんとに『聖なるものを』僕は感じたのだ、さう僕は思つてゐる。これは僕の感じである、人の感じではない。この感じを人に話して、人も亦、さう感じてくれるかどうかはわからない。然し、僕はこう感じた瞬間に、此上もなく生き甲斐を感じたのだから、誰か一人にでも、この感じをお分け出来ればといふ程の心で書いたのがこの物語である。文も筋も幼稚蕪雜を極めてゐる、誠に恐縮はしてゐるが、又自分の魂と熱とは入れた積りである。

352
601

時事パフンツト

輯一第
圓は果して何うなる？
定價五錢 送料二部迄二錢

輯二第
尨大豫算の財界に及ぼす影響
定價十錢 送料二部迄二錢

輯三第
日印通商條約廢棄と其影響
定價十錢 英文二十錢 送料二部迄二錢

輯四第
東支鐵道の解剖
定價十錢 送料二部迄二錢

輯五第
日英綿業戰
定價十錢 送料二部迄二錢

輯六第
五・一五事件
陸海軍公判記
定價十錢 送料一部四錢

發行所 東京東區麴町三ノ丸内 時事新報社

思慮な慶感が彼を包んだ。
「何が彼等をさうさせるか？」

中尉は更に唇をついた。
「僕等だつて人間だ、生命は惜しい。しかし運命の爲に、萬人の利益の爲に、生死いづれを取るべきかを強ひられたら、僕等は戦ふ喜んで死をとる。それが自ら大きく生きるの道だ。」

僕等は平和を望む、然り眞の平和を望む。

奴隷的の平和は望まない。

歴があれば必ず反逆がある。

我等は歴なき世にする爲め最後

の喜びではあるまいか？ 是れこそ眞に天の心ではあるまいか？

故に彼等の氣持はよくわかる。彼等は日本の天皇の御實として、正當の要求をしてゐるんだ。大君より萬民に親しく届はりたる權利に對して、その損はれたる部分を返せといつてゐるんだ。

彼等の要求は正しい。
只彼等がそれを直輸入の競争戦法や、労働ノローカーによらねばならぬ今日を、不憚にも、不申變なくも思ふよ。

大君の目より見れば、百萬長者も、一労働者も同じことなんだ。どもしも百萬長者が、君親我にあり、とでも思つてゐたら大きな間違ひだ。これが今迄すべてを拂けてゐた。

一夫處を尊ざれば、是れ説が罪なりといふのが大尉心だ。すべての運動とその精神は威權そのものから發せねばならぬ。

この大尉心を思へば、資本家も、政治家も、軍人も、聖生も、労働者も考へねばならぬのだ。この大尉心に即してすべてが行はれて行けば、な。

「國內のそれは大尉心に即して貴が行動する。國外

諸君はよく資本家の不勞所得とか。搾取とかをひどく惡んでゐるね。
僕はこの世界の獨士歴史の



上に見る。アフリカを獨斷、アリカを獨斷、シベリアを獨斷、度を獨斷、オーストラリアを獨斷、アジアのすべてを獨斷、いつかそれが人の手に入つたか？
いんからそれが彼等の搾取になつたか？
誰か之を目して不勞所得でなく言ひ得るか？
死強は只「來たり見たり取れられり」
お、未だに驚かしてありでは

い。
この世の姿で、この世の形に平和であるといふのか？
世界は全人類から成つてゐる一人種の連続なくして何で一人の種で、更に諸國日本の姿の

終